

琉球大学学術リポジトリ

バツフェルグラスについて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 常夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20977

バツフェルグラスについて

琉球別島高等弁務官府と東西文化センターの共同計画によってハワイから畜産技術員としてオダガキ氏、ハシモト氏、ヒラバラ氏、ウイリアム氏の4人が来島された。一行は5月14日に来島し、6月3日まで全琉の各地を廻って一般農家及び関係指導者を対象としてパインサイレージの調整、牧草改良、牧場づくり、家畜のエサとしてのギンネム栽培などの指導をされた。牧草の改良には新しい牧草であるバツフェルグラスが氏等によって導入されたので本草の概要について述べたいと思う。

バツフェルグラスの学名は *Pennisetum ciliare* Link でチカランバ属の草である。

原産地はアフリカの南メダターレニアン地方の産である。ハワイには1935年にハワイ大学農学部が同地より導入している。

バツフェルグラスは永年生牧草で、乾燥した牧草でもよく生育し、オーストラリアの内陸地方は年降雨量20インチ(600mm)以下であるが他の牧草よりもよく生育しているようである。沖縄の雨量は約1,800mmといわれているが砂地や夏の早ばつしやすい山地などには放牧草として適当な牧草と思われる。

本草は嗜好性がよく、栄養価値も高く、蛋白質は10.69~13.50% (風乾物中) 含み南方型牧草としてはよい方であろう。

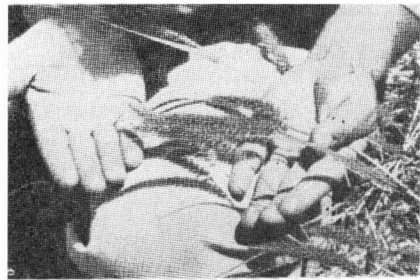
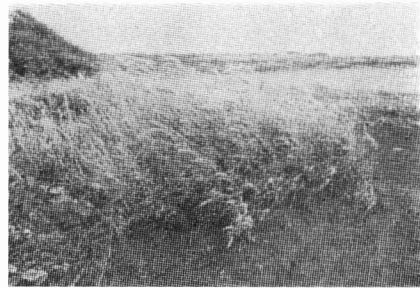
ハワイでは乾燥した低地のラトソル土壌と砂質土壌には特に有用な牧草とされている。

草丈は15~12cm、根は長く豊富な根でよく土壌中の水分と肥料を吸収する。葉は紫緑色で、穂は長さ5~10cmの円筒状で紫色をしている。

播種量は10当300~400gであるが、種子は1年の休眠が必要とされている。新しい種子は発芽しないか或は発芽が悪いといわれる。

播種して苗が13~15cmになってから比較的多くの牛を軽く放牧する。草が10cm位の高さまで牛に食われたら他の牧区に牛を移動するようにする。

でき上った放牧地を正しく、上手に使うてゆけ



上=乾燥地によく生育したバツフェルグラス
下=バツフェルグラスの穂

ば、楽にしかも安く、永年にわたって乳或は肉を生産して、経営地の中でも重要な土地となるであろう。放牧が弱いと牧草の品質は悪くなり、牛はくわなくなり、過放牧になると牧草は消えてしまう。

バツフェルグラスの草地を維持するために3年に1回はバツフェルグラスの種子が完熟するまで放牧地の一部を残し、自然の落下種子で再生させ、草生を維持するような待期放牧をするとよいといわれている。

沖縄における従来の放牧地(牧野)の利用は余りにも放任された自然のままの草地利用がなされている。放牧地は一般に作物のできない、或は作ってもひき合わないような所、いわば役に立たない土地がそれに当てられるのが普通のものである。それだからであろうが、全く放任主義である。そのような土地を少しでも有用なものとなし得るのは牧草と、それを放牧という方法で利用す
(6ページへつづく)



3 病原菌の小胞子（パインアツブルの苗から分離した、一五〇倍）



4 病原菌の大胞子（パインアツブルの苗から分離した、一五〇倍）

（田 盛 正 雄）

（4 ページのつづき）

ることだろうから、各種牧草の特性を生かした土地の利用法を考えるべきではなからうか。

例へば、バラグラスは湿潤すぎて他の作物の栽培できない土地でもよく生育するし、バッフェログラスは砂地の乾燥地でも適するようであるから、その土地の土壤に適した品種を選定して土地を少しでも有効に利用する必要がある。

また、放牧地は格別かまう必要もない、或はかまう価値のないものときめてしまうのは大いに早まった考えである。放牧地は本来はきわめて広さまざまな用途或いは利用のしかたがあるのであって、用いようによつては他のどんな作物がよくできる畑地にも決して勝るとも劣ぬはたらきをするものである。

元来、私達は「放牧」といえば、すぐ「粗放なやり方」ということが頭にくるのが普通である。その際私達の考え方では粗放＝粗末ということになり勝ではなからうか。

しかし、これはいうまでもなく間違いで粗放と粗末は言葉は似ているが意味は全く別である。放牧は手間はかからないが、それだけ頭は十分に使わなくてはならない。いうなれば労力的には粗放な、しかも頭腦的には集約な方法なのである。土と草と家畜との働をよく理解して、これをうまく組合せ、その総体的な生産力を発揮させる。しかも人は主に頭の働きを以つて家畜、草、土そのものの自然の働きを調節しながら進行させ、敢てそこに自らの体力をただ一途に注ぎ込むことは要らない。そこに放牧というものの本来の意義の少なくとも一面が認められるのである。

（宮 城 常 夫）